

甲府一 秋春8強7年ぶりシード

授業の終わりを告げるチャイムが鳴ると、甲府一高ナインが一斉にグラウンドへ駆け出した。「準備急げよ」。声を掛け合いつつ始めたこの日の練習は約1時間。きびきびとした動作でシートノックに取り組んだ。

進学校として文武両道を貫く公立校。練習に当てられる時間は限られていて、全体練習は朝は行わず、放課後の約2時間半だけだ。樋口小太郎主将は「少しでも長く練習するため、全員が無駄な時間を減らすように意識している」と話す。



専用のグラウンドも十分なナイター設備もない。私学の強豪と比較すれば恵まれているとは言えない練習環境。それでもナインは限られた時間、設備で練習の質を高める工夫をしている。

課題すぐに改善

練習メニューは樋口主将と中堅手の伊藤凜人が考えてきた。毎日昼に小田切孝之監督とミーティングを行って最終決定。「限られた時間の中で、足りない部分を効果的に補えるようなメニュー

短時間 練習質高く



ノックを受ける甲府一ナイン。「打倒私学を果たし甲子園」と闘志を燃やす
＝甲府一高グラウンド

ユーを考えている」(樋口主将)という。試合で守りのミスが目立った翌日は守備練習、打線が振るわなかった翌日は打撃練習。試合で出た課題はすぐに改善する

ことを心掛けています。「自分たちで考え、やるべき練習を理解している。やらされているという意識がないので、より練習に身が入る」。小田切監督が意義を強調する。

昨年からはタブレット端末を使い、選手たちがスイングや打球フォームの動画を撮影、チェックすることで改善に役立っている。伊藤は「動画を見過ごすことトするポイントが前過ぎることに気づいた。修正してから打てるようになった」と効果について話す。

冬場には外部コーチを招き、投手陣が自分の不足している筋力を補う「選択制トレーニング」を実践。右腕・加藤天晴は「強化した下半身が安定するようになり、球速も上がった」と手応えを実感している。

心はひとつ甲子園

限られた環境で効率的な練習を積み、最大限の効果を得る。徹底した姿勢が功を奏し昨秋、今春ともに県ベスト8という成績を引き寄せた。だが秋は帝京三、春は山梨学院と私学勢を前に涙をのむ大会が続いた。「私学を倒して優勝」というナインの思いは強い。

バックネットに掲げられた横断幕には「心はひとつ甲子園」の文字が躍る。「一戦必勝で今年の夏こそ甲子園に行く」と樋口主将。打倒私学の思いと伝統校の意地を、7年ぶりのシートで迎えた夏の大会にぶつける。

〈藤原智希〉

第104回全国高校野球選手権山梨大会は23日に組み合わせ抽選会が行われ、7月9日に開幕する。現3年生は入学時からコロナ禍の日々。それでも甲子園を目指し、ひたむきに白球を追い掛けてきた。球児たちの一球に込める思いに迫った。